

私の小さなやりがい

A病棟からB病棟へ移動し半年が経った頃、日勤で働いていると、A病棟の先輩看護師が私の所に来て「この髪の毛何か残せないかな」と言いました。その髪の毛は、〇歳の児の髪の毛でした。その子は、腫瘍摘出後、化学療法を行っていましたが、意識レベル低下、呼吸状態が悪化し挿管になりました。まもなく脳出血を合併して、回復の見込みが厳しく、一般病棟へ移動予定となっていました。そしてその髪の毛は、化学療法の副作用で脱毛が始まり、抜け落ち始めた髪の毛でした。

なぜその先輩看護師が私の所に来たのか。私は、A病棟で小児を受け持ち始めてから15年くらいの間、子どもが好き、そして図画工作が好きなことから、小児科の子ども達のために、夜勤で時間ができると胃管やテープ類に絵を描いて、いつでも使えるように作成し、病棟にある材料でおもちゃを作るなどしてきました。小児だけでなく長期の成人患者さんの誕生日やイベントがあるとメッセージカードを作ったり、部屋を飾ったりなどもしていたため、何かいい案がないか相談に来てくれたのでした。

A病棟とB病棟は隣の病棟ではありますが、その児との関わりは全くありませんでした。しかし、私にも同じ年齢くらいの子どものおと、元気だった子どもが突然このような状況に陥ってしまった両親の思いを考えると、苦しく、いたたまれない気持ちになりました。そして、私にできることがあれば力になりたいと思いました。

その児にもう一度髪の毛が生えてくる可能性は少なく、捨ててしまえばもう一生触れることはできないかもしれないと思いました。いろいろな考えがあるかと思いましたが、自分が親の立場だったらと考えた時、亡くなるかもしれない子どもの髪の毛を残すのは、ありなのか、なしなのか、私だったらこの時期の髪の毛の感触を形見として、一部でも残せるなら残したいと思い、その患児の髪の毛を預かりました。

後日作成とすれば、病棟を移動している可能性があるため、今日の夕方の面会までの時間で、ある材料で何か残せる形はないかと考えました。そして仕事の合間に考え、少しずつ作成をし、患児の髪の毛を使用した似顔絵を完成させました。子どもの顔を描いた用紙に、前髪として髪の毛の束を作って貼り、小学生なので黄色の学童帽を作り上にかぶせました。名前や生年月日、風景などを少し描き、額風に仕上げA病棟の看護師に渡し、私は帰宅しました。

その日の夕方、両親が病室で作品を見て、母からは「小さい頃に髪の毛で筆を作ったことがあります。すごい、こんな風に残すことも出来るんですね。ありがとうございます。頭の近くに置いておいてもいいですか?」、父からも「すごく上手ですね、〇〇も喜んでいてと思います。ありがとうございます」とおっしゃられたそうです。



後日出勤時に、A病棟の看護師から上記内容を教えてもらいました。今回は、誕生日などと違い嬉しい出来事の日でもなく、脱毛した髪の毛をこちらの意向で作品にしたため、どのように受け止めてもらえるのか不安がありました。そのため、喜んでもらえてほっとしたのが一番の気持ちでした。

そして数日後、患児は違う病棟へ移動しました。出勤すると、患児の母からのメッセージカードが私のBOXに入っていました。直接お会いすることもなかったため、A病棟の看護師の面会記録で、両親の

気持ちは知れていましたが、お世辞や建前での言葉だったかもしれないということが、少し頭の隅にあったのが正直な気持ちでした。そのため、直接ありがたいメッセージを頂いたことで、あの似顔絵をよかったと感じてもらえたことが素直に嬉しく、あの時に頑張っって考えて、作って、渡せてよかったなと改めて思いました。

小児病棟にいる患児のシーネなどにはいつもかわいい絵が描かれたテープが貼ってあり、小児病棟ではそれが当たり前のことなのだと思います。しかし、A病棟やB病棟では当たり前ではありません。たくさんさんのルート類で囲まれた患児やその状況を見守る家族にとって、かわいい絵や患児が好きな絵があることでほっとできる感情は、小児科病棟以上に必要ではないかと私は思っています。A病棟でもB病棟においても、小児というだけで重症度が上がります。小児の受け持ちをするスタッフは緊張感が増し、業務を全うするだけで一生懸命な状態です。そして中には絵が苦手なスタッフもいます。そのような状況の中で、患児や家族のことを考え、いろいろしてあげることは大変だと思うのですが、私はその部分を大切にしたいと日々思っています。小児だけに限らず、スタッフの負担を軽減し、患者も家族もみんなが少しでも笑顔になったり、癒やしになったり、うれしい気持ちになったりすることに繋がることを自分が担う。小さなことかもしれませんが、事例を通し、緊張感のある急性期病棟の中で、こういうことも私のやりがいになっているのだと、改めて思いました。

急性期であっても、患者家族にとって人生の一部となるここでの入院生活に、少しでも笑顔や喜びが提供できるよう、今後も自分にできる努力をしていきたいと思ひます。

